

地下に源泉安全基準なし

天然温泉と温泉を一度に満喫できる都心のオアシス。爆発事故があった東京都渋谷区松涛の「シエスパ」は女性専用の新型の温泉施設として、支持を獲得していた。だが、事故後、運営会社と管理会社が突然ガスの危険性の認識がなかった疑いが浮上。利便性重視で、安全性が置き去りにされていた可能性もある。従来は「想定外」だった都会の中にも誕生した温泉施設で起きた「想定外」の事故に、国もあてて動き出したが、専門家は発注側はもう一つ、掘削業者や設計、建設会社も掘削しに高い安全意識が求められる、と警告する。

「ユニマットビニール」「ランドスバ」は施設警理を株式会社に移せば、ガス知識も施設になく、検査制度の制定も開業以來一度もされなかった。管理会社「サンクー」も「ガスが出る」とは事故後初めて知ったとする。消防組員の職務は法律で定められているが、

律がなく、事故は「想定外」にたつた。
 温床を扱った法律に温度法があるが、①掘削で別の源泉に形質しないか②温度成分が有害でないかを規定したもの。天然ガスは有害ななく、塵外ながら同時に空気中に放出と騒音を鳴らしている。

は弊注主。實際の安全対策は弊注主が加工側の熱意や知識の有無にも掛かっている」としている。

●基準策定へ

事故を受け、環境省は厚労省などと共に、指導の統一と義務づけに乗り出した。運営中の温泉施設に出入るため、危険性は認識されていなかった。昭和23年に制定された民法法はそもそも温泉療養を地下に属し加温は想定していなかったといふ。

シーバスはオフィスコンピュータなどとの「ミニマムグループ」の傘下。癒やしブーム

に楽しんで、男性の目を氣に「罠祭りとエスデが同時に」罠祭りとエスデが同時に開かれた。これには驚きと喜びを表現する。昨年一月の開催から半年ほどで入会者は12万人。J民渋谷駅から徒歩7分という立地に、20年前に比べ3分の2の空間で機材が収まり、クリーンの環境を実現している。

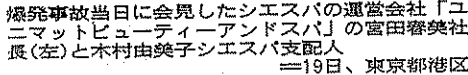
◆批判

シエスパの運営会だが、罠祭業界団体全国製餅協会の幹部は、「さか十分でなくとも発酵させる必要はない」と言われ、無理に早く仕上げる必要はないと主張し、本場は十分に熟成させてから出荷されるべきだと主張して打撃を受ける。

シエスバの

「管理をすべて別業者がやるのは想像できない」

ユ二社は検知器を設置



換氣室の構造が厳しくなつた。このため、事故直前に機械室の配管に亀裂が入ると、DTP、メタンガスが漏出。機械室室内の空気が混合し、10分前後の燃焼になつた時分、千々たりと火花飛散、電氣で着火し、予混合燃焼室で爆発したといわれる。別棟は、燃焼室、廢煙槽と壁が吹飛んでゐた。換氣がなされて、密閉状態で燃焼する「爆燃」と呼ばれる現象も併発したといふられる。

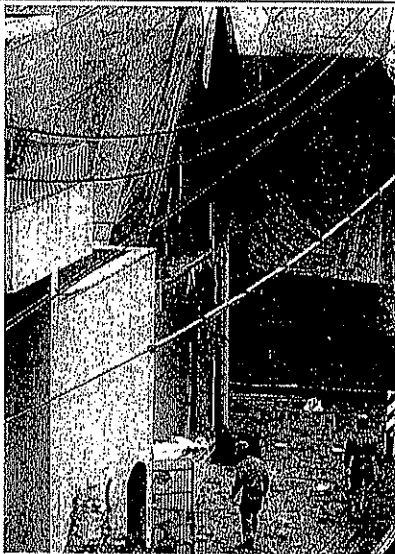
此の機械室は密閉構造で、換氣扇が正常に稼働せず、燃焼を起した疑いがあり、捜査一課は配管の亀裂や腐食などからガス漏出の原因ととも、換氣扇の状況を調べ

温泉施設爆発から1週間

直前に排気トラブルか

天然ガス
甘い認識 過失責任の立証焦点

東京都渋谷区の温泉施設で女性従業員三人が死にいた爆発事故から二十六日で一週間。都内の「癒やし」の場として定着した温泉施設は社会問題（しんかん）させ、泡盛の不備も浮き彫りした。警視庁捜査一課などは業務上過失致死傷容疑で関係業者を捜査し、事故直前に排気設備などにトラブルが起きた可能性もあると調べているが、前代表の事故の刑事責任を問う捜査は長期化する可能性が高い。



シートが掛けられた「シエス」の別棟（金目午前、東京都渋谷区）

半径70センチに破片
「落着きより何倍も大きい音だった」「破片が破れると思った」
現場の女性専用温泉施設「シエス」別棟の近隣住民は爆発のすさまじさを語る。別棟は骨組みだけを壊して大破し、破片も半径七十センチの範囲に散乱。従業員三人は一瞬の休憩室にいて爆風で飛ばされたと思われる、多量な破片で亡くなった。

別棟は地下一階の一室

の天井が激しく損傷。同室には天然ガスを温泉水から分離する装置や屋外に出す配管などが置かれており、捜査一課は配管などから漏れた天然ガスが天井近くにはまり、側面壁などの小さな火花が引いたとみている。

同室には換気扇も設置されていたが、事故直前目立ビルシステム（千代田区）はガス関連設備に

入った換気扇は「作動

して」と証言。事故直前に換気扇や配管などの排気設備に何らかのトラブルが発生、ガスが室内に充満した可能性があると関係者は認める。

「保守は「契約外」
事故後の運営会社などの説明から浮かび上がるのは、天然ガスの危険性に対する認識の低さだ。運営会社、ユニマット（港区）の幹部は「ガス漏れや爆発の危険性がある」と警告をうけたが、「保守管理は、外部業者に任せていた」と発言。保守管理を受託していた目立ビルシステム（千代田区）はガス関連設備に

ついて「契約には含まれていない」とした。業務はサンダー（品川区）が下請けし、温泉槽など水回りの設備が中心。換気扇などは目視するなどしたただけだったとみられる。

敷地が狭い都市型施設の問題も浮かぶ。シエスは温泉のくみ上げや天然ガス分離などの設備を地下室に置いていた。財団法人、中央温泉研究所（群馬県）の目録等資料は「一層内型の設備はガスがたまりやすい。換知器の設置など徹底した安全対策を取るべきだった」と指摘する。

ただ、営業中の温泉施設で発生するガスの管理を定めた法律はなく、各施設に委ねられてきた。こうした都市型施設の構造や法規制の不備も事故の背景になったと見られる。

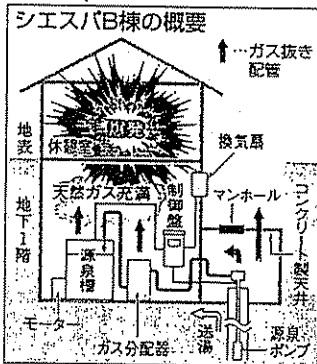
「ガス検知」説明
警視庁捜査一課などは事故翌日、業務上過失致死傷容疑で現場検証を開始。エ社など十カ所も「ガス検知器によるチェックを行う」などと説明していた。地下に存在する「南関東ガス田」や、〇五年に北区の温泉掘削現場で起きた天然ガス火災なども、温泉施設をめぐり同社側が知らなかったとは考えにくい。捜査一課は関係者からの事情聴取を重ね、危険性の認識などについて詳しく調べるという。

温泉施設爆発 ユニマット不動産

ガス検査 住民に約束

開業前 検知器、実際は設置せず

東京都渋谷区の温泉施設爆発事故で、爆発した施設を所有する「ユニマット不動産」などが、開業前に近隣住民に配布した資料で、「運営にあたってはガス検知器によるチェックを欠かさず行い、安全確認に努めます」と説明していたことがわかった。だが、施設にガス検知器は設置されておらず、開業後もガス検知器は一度もチェックしていなかった。警視庁捜査一課は、ユニマット不動産がガスの危険性を認識していたにもかかわらず、検知器が設置されなかった経緯について調べている。



資料はユニマット不動産の設計・施工を担当した「大成建設」が、温泉施設開業前に「近隣住民」に配布した「説明書」である。説明書には「ガス検知器によるチェックを欠かさず行い、安全確認に努めます」と記載されていた。

施設、騒音対策で密閉 設計上の問題調査

爆発があったシエスバB棟のポンプ室は、近隣の騒音対策のため、密閉されていたことが、警視庁捜査一課の調べで分かった。ガスがたまりやすい地下1階のポンプ室に、換気扇が設置されていたが、騒音対策で密閉されていたため、ガスがたまりやすかった。また、ガスボンベの配管も、騒音対策で密閉されていた。専門業者によると、ポンプ室は通常、天然ガスが排出されるため、密閉されていた。また、機械室には、ガス検知器が設置されていたが、騒音対策で密閉されていたため、ガス検知器が正常に動作しなかった可能性がある。

資料によると、温泉施設開業前に「近隣住民」に配布した「説明書」には、「ガス検知器によるチェックを欠かさず行い、安全確認に努めます」と記載されていた。また、「ガス検知器が設置されなかった理由は不明だが、ユニマット不動産がグループの運営会社に依頼が伝達されていた」とも記載されている。

住民説明会は14年ぶりに行われ、計4、5回開かれた。住民側からガスに対する不安の声がたびたび出されたが、ユニマット側は「安全だ」と説明していた。ガス検知器が設置されなかった理由は不明だが、ユニマット不動産がグループの運営会社に依頼が伝達されていた。また、ガス検知器が正常に動作しなかった可能性がある。

ユニマット不動産は、爆発事故後、天然ガス発生は想定していなかったと説明していた。

設計上の問題調査。爆発があったシエスバB棟のポンプ室は、近隣の騒音対策のため、密閉されていたことが、警視庁捜査一課の調べで分かった。ガスがたまりやすい地下1階のポンプ室に、換気扇が設置されていたが、騒音対策で密閉されていたため、ガスがたまりやすかった。また、ガスボンベの配管も、騒音対策で密閉されていた。専門業者によると、ポンプ室は通常、天然ガスが排出されるため、密閉されていた。また、機械室には、ガス検知器が設置されていたが、騒音対策で密閉されていたため、ガス検知器が正常に動作しなかった可能性がある。